

2011/07/07 完成版 URLつき

# 竹林の家

## エッセー

## 第一章 兄弟神

---

<https://www.youtube.com/watch?v=anZEKX0ifOA>

世界は、闇から始まった。

原初の闇は、果ても終わりもなかった。過去も、今も、未来も、重なり合い、すべてに通じていた。

闇の中で、無数の塊が集まり、散らばり、不規則にうごめいた。ぶつかるたび、熱を生んだ。熱は、塊を招いた。すると方位とともに、対流が生まれた。

闇は脈打ち始めた。すると音とともに、時間が流れ出した。

時間は、闇を切り分け、兄神を生んだ。

兄神は、闇の中、独り生きた。形のない彼は、闇と溶け合い、闇をさまよった。

彼は叫んだ。叫び声は、闇に広がった。けれど、彼の声を聞くものはいない。彼に気づくものもない。声は、彼自身に返った。

兄神は、独りを嘆いた。彼を生んだ闇は、彼の嘆きに共鳴し、震えた。すると光とともに、空間が広がった。

空間は、光を切り分け、弟神を生んだ。

兄神は、弟神に呼びかけた。すると音と光が響き合い、地上が姿を現した。

地上は、柔らかく、泡立っていた。

弟神は、地上を歩きだした。兄神は、弟神の後を追った。すると昼と夜が生まれた。

時間が姿を現し、激しく流れだした。昼と夜が、死を持つ生きものを照らした。

兄神は、闇の中から、生きものたちに語りかけた。しかし、誰も、神の名を呼ばなかった。誰も、祈りの声を上げなかった。

弟神は、光の中から、生きものたちを見守った。すると生きものたちは、弟神の歩みに合わせて暮らし始めた。日々は、神の存在を暗示した。人は、自然の中に神を感じた。

兄神は、悲しんだ。彼は、生きものたちと交わりたかった。しかし、小さな命に、大きな命は見えない。彼の願いは叶わなかった。

弟神は、兄のため、自らの体を切り分け、人に与えた。すると人は、神に語り始めた。

兄神は、人びとの声を聞いた。人は正しきことを求め、勝利を願った。

神は、人を愛した。しかし人は、次第に神を忘れ、勝つことに夢中になった。

地上は、敗者と死者であふれた。

兄神は、争いを憎み、嵐となり阻んだ。風と雷が人を襲った。人びとは恐怖に震えた。

弟神は、死者の魂を受け入れ、清めた。人びとは、神を思い出し、許しを求めた。神の家を建て、美しい女を嫁として住ませた。

神は、女を愛し、大切にした。

女は、神を信じ、健やかに生き、死んだ。

神は、死の悲しみを知った。慟哭は地を震わせ、人びとを困惑させた。

人びとは神殿に通い、神を慰めた。すると地鳴りが静まった。それから、神詣では、神を鎮める儀式となった。

時が流れ、人びとは再び神を忘れた。後には、由来の分からぬ習慣だけが残された。

## 第二章 密室

---

<https://www.youtube.com/watch?v=42fWKmxA1do>

夜明け前、神殿が鳴いた。

鳴き声は、内部で増幅し、低いうなりに変わった。うなりは、波となり、空気を動かした。闇に、女の寝姿が現れた。

女は寝返りを打った。緋色の肌襦袢から、女の匂いが広がった。

湿り気を帯びた空気は、匂いを吸い込み、密度を増し、入口を求め渦巻いた。渦は広がり、女をつま先を舐めた。

かかとを持ちあげ、女が渦を蹴った。衣が開き、端から内股が現れた。

風は産毛を揺らし、内股を這い上がった。衣に滑り込み、下腹からみぞおち、乳房をかすめて、首筋から耳に抜けた。うなりが耳を塞いだ。

女が目を開け、闇を見た。

風は影となり、女の顔に触れた。影は緩んだ唇を押し広げ、女の胸に入り込んだ。

闇の中で、影と息は一つに重なり、音に姿を変えた。音は、高鳴り、速度を上げた。

影を吸い込み、膨らみ過ぎた女の胸は、波打った。指先が震え、呼吸が熱を帯びた。女の唇から、苦しげな声がもれた。

影は声を飲みこみ、ますます膨らんだ。床に、女の体を押し付けた。

女は、膝を立て、もがいた。無数の汗が流れ落ち、体中を引っ掻いた。かゆみが肌を這った。女は腰を上げ、体を反らせた。痙攣が女を襲った。

肺にたまった影が、女の胸を突き上げた。

女は、歓声とともに息を放った。影が、女の唇から飛び出した。

天井に舞い上がった影は、とぐろを巻き、漂った。

息と影を吐き切ると、女は、床に崩れ落ちた。

影は、天井から垂れさがり、女の体に巻き付いた。

女は目を閉じ、浅い眠りに落ちた。

闇に、静けさが戻った。

<https://www.youtube.com/watch?v=60ITq7iALY>

竹は、地面からまっすぐ伸びあがり、物静かに佇んでいる。意外なほど匂わない。目の前にあっても、どこか遠く、閉ざされた彼らだけの世界を秘めている。ガラス瓶に詰められた香水のように、青く甘い芳香を隠し持っている。

竹は香りを隠し、竹林は神殿を隠し、神殿は女を隠している。奥に潜むのは、神殿に籠り続けるお籠りさん。名を音川聖美（おとかわさとみ）という。

聖美は、日の出とともに雨戸を開き、日暮れとともに闇に籠る。緋色の衣をまとい、神のお下がりをいただく。仕事を捨て、家族を捨て、神を選んだ女。人と交わず、棚に飾られた人形のように、異なる流れに身を置く。

かつて神殿は、頼るものがない人びとの住処だった。子どもは大人になるまで、女は嫁入り先が見つかるまで、神に頼った。

強く、美しいものから、去って行った。

病人や老人も、死に触れて神が嘆かぬように、自ら姿を隠した。彼らがどこへ消えたのか、誰も知らない。けれど人びとは、竹になったと信じた。

竹林は、不遇な人びとの墓標であり、村の大切な財産だった。家も、道具も、竹から作られた。

神と人と竹が作り上げた均衡は、大戦とともに崩れた。国は、弱い人びとの保護を始めた。神殿は無人となり、聖域が拓かれた。キャンプ場が作られ、毎年、多くの中学生が訪れた。聖美も、その一人だった。

食事も、睡眠も、休息さえも一斉に始め、一斉に終わる。体の声を聞かず、条件反射で動く日々。号令が聖美を苦しめた。眠っている時でさえ、巡回の足音が耳に響いた。

闇の中で、人に囲まれ、動くことも許されず、時が過ぎるのを待った。一秒ごとに堅くなる体に、死の感覚が広がった。

聖美は怯え、声にならない声をあげた。窓ガラスが震え、うなりが耳に返った。すると体から力が抜け、金縛りが解けた。

布団に起きあがった聖美は、窓の外に影を見た。影は、竹林に消えた。

聖美は、影を追い、竹林に踏み込んだ。

竹は、太く黒い線となり、白み始めた空に格子模様を描いた。

竹林は鳥籠に姿を変え、聖美を包んだ。外へ出ることを拒み、外から入ることを拒んだ。静止した世界に、影の姿はなかった。

聖美は、大きく息を吐いた。すると影が現れ、呼吸とともに聖美の胸に入り込んだ。聖美は激しく咳き込んだ。影は吐きだされ、朝日を浴びて姿を消した。竹林には、聖美の体だけが残された。

聖美は竹林から逃げ出し、布団に戻った。昨日と変わらぬ朝を迎え、昼過ぎにキャンプ場を去

った。

けれど、籠から飛び出した小鳥は、空を舞い、やがてもとの籠に収まった。

## 第四章 竹林の家

---

<https://www.youtube.com/watch?v=0ghKEMAUD-U>

山根善吉（やまねぜんきち）は、ガスコンロに火を点けた。三十年以上繰り返してきた朝の支度に胸を弾ませた。

神の家は、東西南北に入口を持ち、玉砂利を敷きつめた庭の真ん中に建っている。

人の家は、庭と竹林の間に建てられ、竹林の家と呼ばれ親しまれた。

日が沈み、神が去っても、神詣では終わらない。神殿の雨戸を締め切り、闇の中で一夜を過ごす。

何もない部屋で過ごすことは想像以上に辛く厳しい。はじめは衣食住が保障された暮らしに、幸福な未来を夢見る。お籠りさんになりたいという。けれど、他人の支えなしに成り立たない無為の暮らしに耐えられず、作為を求める。太陽に背を向け、電灯を選ぶ。

多くは、昼の間に去っていく。夜の神殿に籠ったものも、闇の中で蠢く影に怯え、朝には去っていく。

やがて誰も神殿を訪れなくなった。

山根は、日が沈むと神殿を去り、竹林の家で寝起きする。神に仕える暮らしを愛した。けれど三年前、聖美が現れすべてが変わった。

ある朝、山根が神殿の雨戸を開けると、聖美が眠っていた。声をかけても、体を揺すっても起きなかった。

山根は、聖美が眠るそばで、朝も、昼も、神のお下がりを食べた。夕方の膳を食べようとした時、やっと目を覚ました。

聖美は、山根がすすめた膳を食べ、そのまま夜の神殿に籠ってしまった。

翌朝も、そのまた翌朝も、なぜここにきたのか、何のためにここに居るのか、聖美の口から語られることはなかった。人びとは、聖美が神殿を去るまで待つことにした。けれども三日経っても聖美は神殿に籠り続けた。

見かねた山根は聖美を竹林の家に招いた。風呂を沸かし、緋色の衣を渡した。聖美は黙って受け入れた。

以来、人びとから聖美はお籠りさんと呼ばれるようになった。

<https://www.youtube.com/watch?v=aWAYOAoyBUI>

白みはじめた東の空が、闇を薄めた。

聖美は西の入口を開け放った。闇に慣れた目には、薄闇にとける庭の玉砂利も明るく見えた。聖美が庭に踏み出すと、黒い影が神殿を揺らした。

「おいで。夜が明ける」

影は、闇を求めて東に逃げた。

聖美は神殿に飛び込み、北の入口を開け放った。床に敷かれた竹のむしろが見えた。

東に逃れた影は、上昇と下降を繰り返して、小さく震えた。

「逃げても駄目よ」

南の入口が開かれると乱雑に散らばった夜具が輪郭を浮かび上がらせた。

追いつめられた影は、天井に逃れた。

聖美は東に残った薄闇に立った。

「ずっと天井に張りついているつもり」

影は、天井をぐるぐると回り始めた。

「遊んであげるから、降りていらっしやい」

聖美が手招きすると、影は天井から垂れさがり、聖美の体に巻きついた。

「日が暮れたらわたしのところへかえっていらっしやい」

白い手が黒い影をなでた。影がうねり、聖美の体を締め上げた。

庭の玉砂利が朝日を反射した。神殿に光が差し込んだ。力を失った影は、聖美の体からずり落ちた。

「忘れないで」

影は床に輪を描くと、輪郭を失い、光の中に消えた。



## 第六章 弟神

---

<https://www.youtube.com/watch?v=rXfXYZfvrc0>

太陽が、弟神の訪れを告げる。

世界は色を取り戻し、動き出す。

弟神は、森羅万象を我が子として見守る。人びとの笑顔にうなずき、通り過ぎる。そして、愛しい妻が待つ神殿へ足を向ける。

キャンプ場では、子どもたちが楽しげに働いていた。

弟神は、ふいに左手を見た。すると少年が一人ぼっちで部屋に籠っていた。

少年は、ひどく眠そうだった。やせ細り、呼吸も弱々しかった。けれど、必死に参考書を読んでいた。

弟神は少年の肩に手をおいた。少年は気づかず、呪文のように英文を読み続けた。弟神は再び手をおいた。すると少年は背伸びをして、弟神の手を払い落とした。弟神の心は、痛みを感じた。少年をじっと見つめ、気づくの待った。けれど少年は、目前に迫った試験以外、関心が湧かなかった。弟神は、それもよしとし、少年の指をそっとなでた。

竹林の家では、朝の膳の支度をおえた山根が、手を打ち祈っていた。弟神は山根に親しみを感じた。肩に手をおくと、山根は静かにほほ笑んだ。

膳は神殿に運ばれ、部屋の真ん中に据えられる。神への祈りは、線香が消えるまで続く。

聖美は膳の脇に座り、何も無い空間を見続けた。山根は庭先に立ち、聖美を見守った。弟神は神殿を照らし、すべてを見守った。

世界は光にあふれ、輝きを増した。

## 第七章 聖美

---

<https://www.youtube.com/watch?v=wJ1d6LJcuRU>

声がする。

はじめはぷちぷちと泡のようにさざめく。やがて激しさを増し言葉に変わる。無数の声が聖美を囲む。

聖美は一つ一つに耳を傾けた。すると感覚が聖美の体に流れ込む。

どの声もひたすら語り続けた。誰も聖美を顧みない。

ある夜、一人になった聖美はささやいた。すると息とともに黒い影が現れた。

影はとぐろを巻いて、聖美の傍らに居着いた。聖美は、もの言わぬ影に繰りごとを述べた。そしてある夜、影にたずねた。

「あなたは誰？」

影は、言葉にならぬ音を発した。すると次の瞬間、聖美は神殿にいた。

以来、昼の間は神の妻として神殿に仕えた。夜になると影の母となり神殿に籠った。

昼と夜の間、聖美は竹林の家で湯につかる。妻でも母でもない自分に返る。

聖美は思った。まとわりつく黒い影の感触を求めた。

「あの子が待っている。名を呼ばなくては」

聖美は湯からあがった。洗いたての緋色の衣をまとい、神殿へ急いだ。

## 第八章 兄神

---

<https://www.youtube.com/watch?v=WucN4DbWLkg>

闇の中で、兄神は聖美を思った。すると幾千、幾万の聖美が姿を現した。兄神は喜んだ。けれど手を伸ばすと聖美は消えてしまう。

人の一生は短く、儂い。夜空に咲いた花火のように、一瞬で生と死を迎える。

兄神は祈った。聖美の温もりを求めた。熱を求めて闇の中をさまよった。

兄神が熱に触れると、楽しいものはよりうかれ、悲しいものはより嘆いた。やがて喜びの声は、嘆きの声にかき消された。

兄神は聖美の名を呼んだ。けれど神の言葉を人は知らない。耳鳴り、空耳として忘れられた。兄神は泣いた。すると聖美の声がこだました。

「わたしのあなた。帰っておいで」

声を目指して、兄神は聖美の胸に飛び込んだ。今宵も閉ざされた神殿に影と聖美が籠る。

影が神であることは、誰も知らない。